

J1 降格クラブが J2 クラブの観客数に与える影響に関する研究

スポーツマネジメント研究領域

5013A063-6 山本 亜雅沙

研究指導教員：平田 竹男 教授

【背景】

Jリーグの特徴としてディビジョン間の昇降格制度が挙げられる。1999 年の J2 開幕によって J リーグはクローズリーグからオープンリーグへ移行した。J1、J2 間では 2013 年までに延べ 37 クラブが降格を経験している。その中には J1 優勝経験のある 6 クラブも含まれ、そのうち 3 クラブが J1 優勝の後に J2 降格を経験している。この様な現状において、J2 の年間平均観客数は 2003 年の 1 試合あたり 7,895 人をピークに減少、横ばいの状態である。この様な現状ではあるが、2012 年の J リーグ観戦者調査では観戦頻度が平均「13 回」であり、「21 回以上」という回答も 24%に上った。しかしながら、チケット種別に見ると観戦頻度中央値はシーズンチケット購入者が「20 回」、最も回答数が多かった「21 回以上」も 45.3%に上るのに対し、シーズンチケット以外の観戦頻度中央値は「5 回」、最も回答数が多かったのは「0 回」の 19.6%であり観戦者の多くがシーズンチケットを持ったリピート観戦者であることが伺える。このことから、観客数の増加のためにはいわゆる「ライト層」の取り込みが重要になってくると言えるだろう。2013 年のガンバ大阪の降格はいわゆるガンバ効果として話題を集めた。J2 の観客動員数は前年度比にすると約 15%アップし、ガンバ大阪がアウェイで対戦をした 21 クラブのうち札幌と熊本を除く 19 クラブで 2013 年度の最多入場者数を記録した。そこで、有名クラブ、有名選手の J2 降格は話題性、J2 の観客数増加といった面でプラスの効果を期待できるのではないだろうか。先行研究として J リーグの観戦需要に関する研究(河合, 2008)や J リーグにおける対戦相手が観客動員数の増減に与える影響(畔蒜, 2011)に関する研究などがあるが、いずれも J1 を対象としたものであり、J2 に対する研究はない。また、2013 年のいわゆるガンバ効果を実証的に示した研究や J1 クラブが J2 に降格した際に観客数に与える影響を示した論文は無い。本研究では J1 から降格したクラブが J2 の観客数に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【手法】

研究 1：J リーグにおける対戦相手が観客動員数の増減に与える影響(畔蒜, 2011)の手法を参考に「J2 全試合における収容率と年間平均収容率の差の算出」および「各クラブの年間平均値の算出」を行った。

研究 2：「収容率と年間平均収容率の差の値」を従属変数に、「直近の J1 在籍年数」「対戦クラブのホームタウンとの距離」「開催曜日」を独立変数とし重回帰分析を行った。従属変数の選択理由としてアウェイクラブが対戦相手であるホームクラブの観客数に影響を与える場合の要因に「J1 降格クラブ」であることが関係しているか否かを明らかにすることであるため「収容率と年間平均収容率の差の値」を選択した。

研究 3：2013 年シーズンに J2 に在籍し対戦相手が G 大阪であるホームゲームを主催した以下 21 クラブを対象に、J1 降格クラブが対戦相手であった場合にホーム主催クラブが特別な動員やイベントなどを実施しているのか否かをアンケート調査した。アンケート項目は対ガンバ戦(ホーム)における動員やイベントの有無、それらの影響、2013 年以外の対 J1 降格クラブ試合における動員の有無に関してである。

【結果】

結果 1：「収容率と年間平均収容率の差の年間平均」のトップ 20 のうち、J1 降格クラブは 11 クラブとなった。また、J1 降格クラブ延べ 34 クラブ中、31 クラブの年間平均値がプラスとなった。

表 1 収容率一年間平均収容率の差の年間平均トップ 20

	年	クラブ名	収容率一年間平均収容率(年間平均)
1	2013	G大阪	35%
2	2000	浦和	34%
3	2002	C大阪	23%
4	2011	F東京	21%
5	1999	札幌	15%
6	2006	横浜F	12%
7	2010	千葉	10%
8	2010	柏	10%
9	2003	新潟	9%
10	2008	広島	9%
11	2004	仙台	9%
12	2012	横浜F	8%
13	2011	横浜F	8%
14	2008	仙台	8%
15	2001	仙台	8%
16	2010	札幌	8%
17	2008	横浜F	8%
18	2007	仙台	8%
19	2006	東京V	7%
20	2009	横浜F	6%

結果 2 : 「収容率と年間平均収容率の差の値」を従属変数に「直近の J1 在籍年数」「対戦クラブのホームタウンとの距離」「開催曜日」を独立変数とした重回帰分析は「直近の J1 在籍年数」と「休日開催」は「収容率と年間平均収容率の差の値」に正の影響を与え、「対戦クラブのホームタウンとの距離」は「収容率と年間平均収容率の差の値」に影響を与えなかった。J1 から降格したクラブは J2 の観客数の増加に影響する。特に直近で J1 在籍年数が長いクラブが降格した場合において影響力が高い。

表 2 重回帰分析

独立変数	従属変数	収容率と年間収容率の差の値		
		回帰係数	t	P-値
定数項		-0.079	-16.780 *	0.000
直近の J1 在籍年数		0.012	20.150 *	0.000
距離		0.000	0.278	0.781
休日		0.081	18.310 *	0.000
補正 R2			0.141	
F 値			0.000	
N=4500		*p<0.001		

結果 3 : 対象とした 21 クラブ中、徳島、栃木、鳥取、横浜 FC、長崎の 5 クラブから回答を得られた。栃木を除く 4 クラブがガンバ大阪戦に対して通常以上の予算を割いて広告告知、スポンサー営業と言った動員やスタジアムイベントを行っていることが明らかとなった。ガンバ大阪戦の影響に関しては表 3 の通りである。収入や注目といった短期的な影響は挙げられたが、長期的な影響は徳島が「大規模集客に対応するための運営体制が確立出来た」という点のみであった。2014 年以降の J1 降格クラブとの対戦試合に関する取り組みについては横浜 FC、長崎が磐田に対して動員を行っており、今後も J1 降格クラブとの対戦試合に関して特別な取り組みを実施したいという。また、栃木も J1 降格クラブだからといって特別な動員は行わないが、ネームバリューのあるクラブが対戦相手であるとマッチスポンサーが付きやすく、観客も増えるのは事実であり、クラブ単体のパワーでは出来る事も限られる中で周りの力を借りてスタジアムを盛り上げたいという。

表 3 ガンバ大阪戦の影響

クラブ名	ガンバ大阪戦の収容率-年間平均収容率	短期的	長期的
徳島	27.4%	大規模集客の運営体制の確立	大規模集客の運営体制の確立
栃木	37.0%	ガンバ大阪に勝利したことでプレーオフ進出の可能性や期待感をファンと共有	アンケートをとっていないため関係性は明言できないが年間平均入場者数が過去最高となった
鳥取	37.4%	ガンバ戦のみの注目	特になし
横浜 F	41.1%	チケット売上	特になし
長崎	58.6%	有名クラブ・有名選手のいる試合は来場者が多かった	特になし
全クラブ平均	35.21%		

【考察】

J2 の試合を観戦する際の動機の一つとして対戦相手が J1 に在籍していたクラブであるからということが挙げられると考える。そのため、J2 クラブがホームゲームに足を運んでももらうためには J1 降格クラブとの対戦試合を活用すべきだと考える。J1 降格クラブが対戦相手となる試合の前の重点的な試合告知など積極的な動員によって、今までスタジアムへ足を運ばなかった観客層に対して「魅力的な対戦相手」という動機づけが出来るのではないだろうか。J1 降格クラブとの試合は J2 ホームクラブにとって、魅力的なコンテンツとして認識されていることが伺えた。当該試合に限っては観客数の増加、つまりは入場料収入の増加やマッチスポンサーの獲得によって通常の試合以上の収入が見込まれる。ただし、それらは当該試合に限ったものであり、長期的な影響に繋がられていないことが課題であろう。栃木のように当該試合に勝利したことが年間平均観客数に繋がったのではないかとクラブ側の見解もあり、一時的な効果で終わらせないための一つの要因として勝利や白熱した試合が観られるかということが挙げられるだろう。また、ただし、昇降格を繰り返すクラブにおいては J1 降格クラブとしての観客数への影響が低くなると考えられる。そのため、どの程度、昇降格を繰り返すと影響度合いが低くなるかを実数値化することが今後の課題である。

【結論】

J1 降格クラブ、中でも直近の J1 在籍年数の長いクラブは J2 に降格した翌年のアウェイでの観客数の増加に影響することが明らかになった。J1 降格クラブは、観客にとって魅力的な対戦相手であり、スタジアムに足を運ぶ動機の一つに挙げられると考察する。ホームクラブ側にとっては観客数の増加、入場料やスポンサー収入の増加、大規模集客に対応するための運営体制の確立とノウハウ蓄積という点で魅力的なコンテンツと言える。しかし、影響力は短期的なものであり、このコンテンツを活用することで長期的な影響に繋がっていくことが J2 クラブの発展に寄与するのではないかと示唆する。